

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2017/08/02

ホリデーシーズン後を意識

通貨ペア	基調		ページ数
ユーロ/円	↗	欧日の金融政策の方向性の違い 予想レンジ: 125.800~134.200円	2-3
ユーロ/ドル	↗	2年超続いたもみ合いを上抜け 予想レンジ: 1.14700~1.21700ドル	4-5
ポンド/円	→	方向感出にくい 予想レンジ: 142.000~148.500円	6-7
ポンド/ドル	→	英スーパー・サズデーに注目 予想レンジ: 1.28500~1.35000ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2017 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 7月の推移

EUR/JPY

7月のユーロ/円相場は127.997~130.770円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.7%の上昇(ユーロ高・円安)となった。

前月からのリスク・オンの流れを引き継いでスタートすると、11日に昨年2月以来の高値となる130.770円まで上昇した。その後128円台半ばまで下押しも一時的。根強い欧州中銀(ECB)の緩和縮小期待を背景に底堅く推移すると、31日にユーロ/ドルが2015年1月以来の高値となる1.18ドル台半ばまで上値を伸ばした動きに連れて130.50円付近まで再び上昇した。



四本値

OPEN	128.143
HIGH	130.770
LOW	127.997
CLOSE	130.569

6日	6月8日のECB理事会議事録が公表され、「インフレ見通しが改善すれば緩和的なバイアスが見直される可能性」「緩和的バイアスの再検討を議論」などが明らかとなった。緩和縮小観測の高まりからユーロ買いが優勢となった。
7日	日銀が2月以来となる指値オペ(利回り表示で0.110%で無制限に買い入れ)を実施、国債買い入れも増額(残存5年超10年以下を、前回比で500億円増額)した。緩和継続姿勢が示された事から、円売りが優勢となった。米7月雇用統計の好結果を好感してNYダウ平均が上昇した事も追い風となり、ユーロ/円は130.10円前後まで一段高となった。
20日	ECBは理事会で政策金利の据え置きを決定。ドラギ総裁が「(資産買い入れプログラムの変更の)議論は秋に行う」「景気の一層の上振れに向けて勢いは増している」「ECBはインフレ率が次第に目標に到達することに自信」などと発言。最近のユーロ高に懸念を示さなかった事もあり、ユーロ買いが強まった。「(ロシアゲートを捜査している)モラー特別検察官がトランプ米大統領のビジネスに捜査範囲を拡大したようだ」との一部報道に反応してユーロ/ドル相場でもユーロ買い・ドル売りが強まった影響もあり、ユーロ/円は130.20円台まで一段高となった。
24日	独7月製造業PMI・速報値が58.3と市場予想(59.2)を下回り前回(59.6)から低下し、独7月サービス業PMI・速報値も53.5(予想54.3、前回54.0)となった。これを受けてユーロ売りが強まるとユーロ/円は129円台を割り込んだ。なお、その後に発表されたユーロ圏7月製造業PMI・速報値は56.8(予想57.2、前回57.4)であった。
25日	独7月Ifo景況感指数が116.0と予想(114.9)を上回り、3カ月連続で過去最高を記録した。トランプ米大統領の「EUは米国に対して非常に保護主義的」との発言もあり、ユーロ/円は一時130.50円台まで上昇。ただ、その後は国際通貨基金(IMF)がレポートで、欧州中銀(ECB)に対して緩和策の解除に慎重になるよう求めた事を受けて失速した。
31日	ユーロ圏7月消費者物価指数は前年比は事前予想通り+1.3%だったが、コアは前年比+1.2%と予想(+1.1%)を上回った。

EUR/JPY

日経平均

OPEN	20056.32
HIGH	20200.88
LOW	19856.65
CLOSE	19925.18

独 D A X

OPEN	12396.34
HIGH	12676.52
LOW	12097.36
CLOSE	12118.25

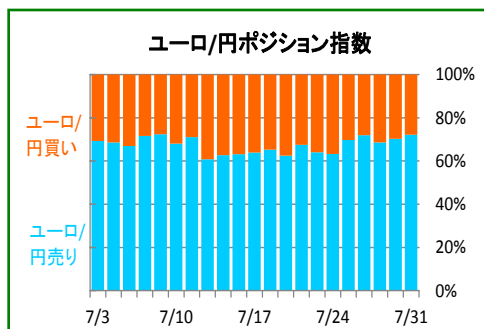
独2年債利回

OPEN	-0.566%
HIGH	-0.563%
LOW	-0.683%
CLOSE	-0.680%

独10年債利回

OPEN	0.494%
HIGH	0.619%
LOW	0.444%
CLOSE	0.543%

7月のポジション動向



8月のユーロ圏の注目イベント

- ・4-6月期ユーロ圏GDP・速報(1日)
- ・6月ユーロ圏小売売上高(3日)
- ・EU財務相理事会(11日、24日)
- ・4-6月期独GDP・速報(15日)
- ・8月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(22日)
- ・8月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(23日)
- ・ジャクソンホール会合(24~26日)
- ・8月独Ifo景況感指数(25日)
- ・8月独消費者物価指数・速報値(30日)
- ・8月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(31日)

8月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

7月は「緩和継続の円」に対し、「緩和縮小が見えてきたユーロ」と、金融政策の方向性の違いがユーロ/円相場を支えた。こうした流れが早期に変わる公算は小さいだろう。市場では、9月7日のECB理事会で緩和縮小の具体策に言及するとの見方が強い。こうした中、ドラギ総裁が今月24-26日のジャクソンホール会合に出席することが明らかとなり、市場ではECB理事会に向けた地ならしを行うとの観測が浮上している。緩和縮小について前向きな発言があればユーロ買い材料視されよう。その他、ECBの緩和縮小期待が高まるか、31日のユーロ圏8月消費者物価指数・速報値にも注目したい。

テクニカル面では、先月11日高値以降は概ね128円台半ば~131円手前でレンジを形成している。目先は上下どちらにブレイクするか見極めが肝心である。レンジに入る前は上昇トレンドであった事から、どちらかといえばレンジは上抜ける可能性があるとしており、その場合の上値目処として、2014年12月高値~2016年6月安値の下げ幅61.8%戻し(134.265円)が挙げられる。(川畑)

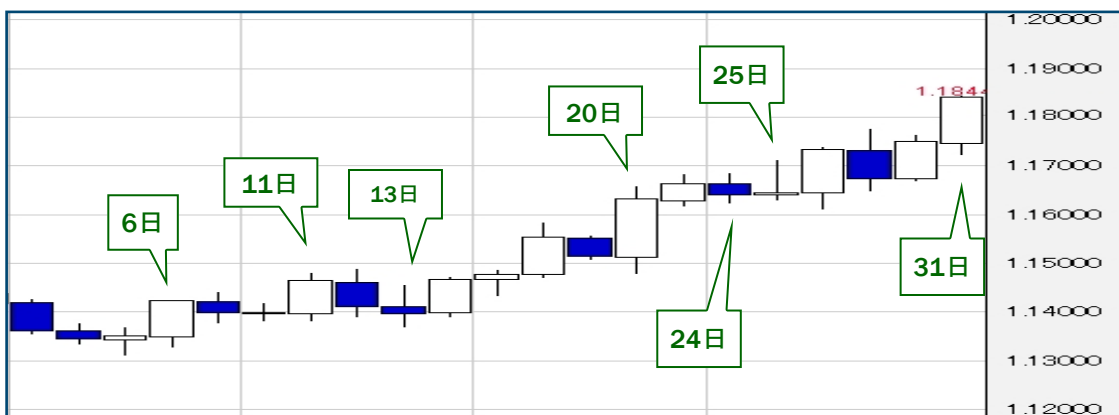
(予想レンジ: 125.800~134.200円)

EUR/USD

ユーロ/ドル 7月の推移

7月のユーロ/ドル相場は1.13123~1.18444ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約3.7%の上昇(ユーロ高・ドル安)となった。

欧州中銀(ECB)の緩和縮小観測を受けたユーロ高と、米連邦準備制度理事会(FRB)の追加利上げ観測の後退を受けたドル安により、ユーロ/ドルは堅調に推移。米政局不安(ロシア・ゲート疑惑やオバマケア法案の廃案失敗、スパイサー報道官を初めとした複数のスタッフの更迭など)により減税やインフラ投資が先送りされるとの懸念もまた、ドル売りに拍車を掛けた。こうした中、31日に心理的節目の1.18ドルを突破すると、2015年1月以来の高値となる1.1840ドル台まで一段高となった。



四本値	
OPEN	1.14203
HIGH	1.18444
LOW	1.13123
CLOSE	1.18422

6日	6月8日のECB理事会議事録が公表され、「インフレ見通しが改善すれば緩和的なバイアスが見直される可能性」「緩和的バイアスの再検討を議論」などが明らかとなった。緩和縮小観測の高まりからユーロ買いが優勢となった。
11日	ドナルド・トランプ・ジュニア氏が昨年の米大統領選中にロシア人弁護士と会合したとされる問題について、「大統領選でクリントン氏が不利になる情報を提供すると仲介者からメールで伝えられていた」と一部で報じられた。ブレインードFRB理事らが追加利上げに慎重な見方を示した事もドルの重石となり、ユーロ/ドルは1.1480ドル付近まで上昇した。
13日	「ECBは9月7日の会合で量的緩和を段階的に縮小する計画を公表する可能性がある」「ドラギECB総裁がジャクソンホールで演説を行う模様」との一部報道を受けてECBの量的緩和縮小観測が高まると、独金利が上昇すると共にユーロは下げ幅を縮小した。
20日	ECBは理事会で政策金利の据え置きを決定。ドラギ総裁が「(資産買い入れプログラム変更の)議論は秋に行う」「景気の一層の上振れに向けて勢いは増している」「ECBはインフレ率が次第に目標に到達することに自信」などと発言。最近のユーロ高に懸念を示さなかった事もあり、ユーロ買いが強まった。「(ロシアゲートを捜査している)モラー特別検察官がトランプ米大統領のビジネスに捜査範囲を拡大したようだ」との一部報道を受けてドル売りが強まると、ユーロ/ドルは1.1650ドル台まで一段高となった。
24日	独7月製造業PMI・速報値が58.3と市場予想(59.2)を下回り前回(59.6)から低下し、独7月サービス業PMI・速報値も53.5(予想54.3、前回54.0)となった。これを受けてユーロが売られた。なお、その後に発表されたユーロ圏7月製造業PMI・速報値は56.8(予想57.2、前回57.4)であった。
25日	独7月Ifo景況感指数が116.0と予想(114.9)を上回り、3カ月連続で過去最高を記録した。トランプ米大統領の「EUは米国に対して非常に保護主義的」との発言もあり、ユーロ/ドルは一時1.1710ドル台まで上昇。ただ、その後は国際通貨基金(IMF)がレポートで、欧州中銀(ECB)に対して緩和策の解除に慎重になるよう求めた事を受けて失速した。
31日	ユーロ圏7月消費者物価指数は前年比は事前予想通り+1.3%だったが、コアは前年比+1.2%と予想(+1.1%)を上回った。その後、月末のロンドンフィキシングに向けてユーロ買いが活発化すると、ストップを巻き込みながら1.1840ドル台まで上昇した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/USD

NYダウ平均

OPEN	21392.30
HIGH	21929.80
LOW	21279.30
CLOSE	21891.12

独10年債利回

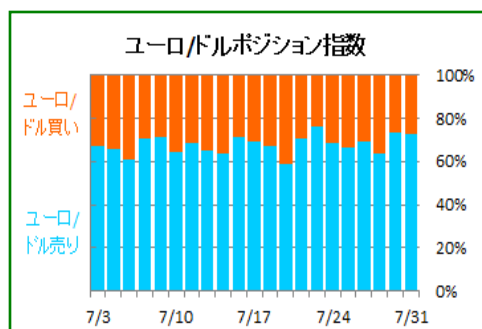
OPEN	0.494%
HIGH	0.619%
LOW	0.444%
CLOSE	0.543%

米10年債利回

OPEN	2.3143%
HIGH	2.3945%
LOW	2.2234%
CLOSE	2.2942%

7月のポジション動向

8月のユーロ圏の注目イベント



- ・4-6月期ユーロ圏GDP・速報(1日)
- ・6月ユーロ圏小売売上高(3日)
- ・EU財務相理事会(11日、24日)
- ・4-6月期独GDP・速報(15日)
- ・8月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(22日)
- ・8月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(23日)
- ・ジャクソンホール会合(24~26日)
- ・8月独Ifo景況感指数(25日)
- ・8月独消費者物価指数・速報値(30日)
- ・8月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(31日)

8月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

7月は「緩和縮小期待が高まるユーロ」に対し、「年内利上げ観測の後退や米政府内の混乱が重石となるドル」と、ファンダメンタルズ面からの明暗が分かれる形でユーロ/ドルは上昇した。こうした流れが早期に変わる可能性は小さく、今月も引き続きユーロ買い・ドル売り材料に反応しやすい展開が見込まれる。今月24-26日のジャクソンホール会合で、ドラギ総裁が講演を行う予定となっている。緩和縮小の具体策についての発表が予想されている来月7日のECB理事会を前に、総裁が地ならしのような発言をするか注目したい。テクニカル面では、2015年8月高値を突破して2年以上続いたもみ合いを上抜けた事で、2014年後半からの急落に対する戻りを確かめる動きが見込まれる。2014年5月高値~2017年1月安値の下げ幅の38.2%戻し水準(1.17435ドル)を突破しており、次の目処として1/2戻し水準(1.21731ドル)が挙げられる。

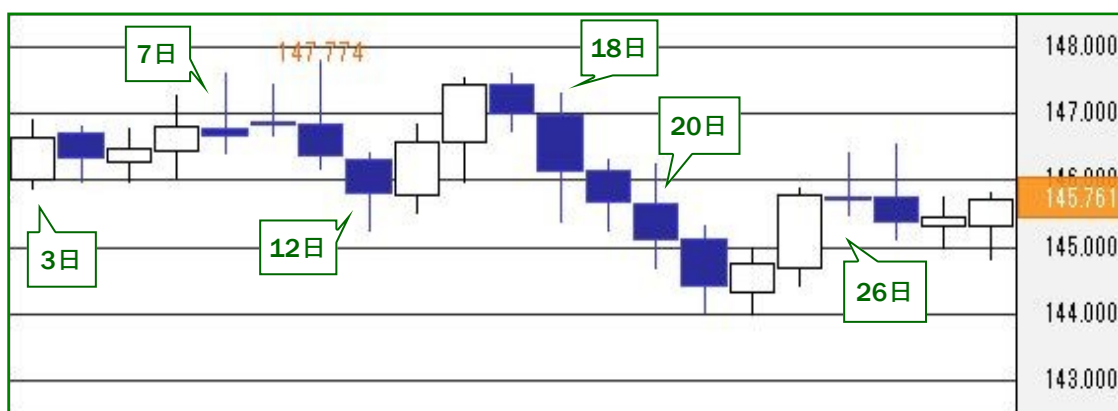
ただ、シカゴIMMの投機筋ポジションは、7月21日発表時点で2011年5月以来の高水準となる約9.1万枚のネットロングを記録した後もほとんど減っていない。ユーロ/ドル相場が4月以降ほぼ一本調子で上昇するなど、高値警戒感もくすぶっている。一度調整が入ると思いのほか下押しが深くなるリスクがある点に留意したい。(川畑)

(予想レンジ: 1.14700~1.21700ドル)

GBP/JPY

ポンド/円 7月の推移

7月のポンド/円相場は144.029～147.774円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.5%の小幅な下落(ポンド安・円高)となった。日銀が大規模緩和を長期間維持する姿勢を示した事などから147円台後半に上昇して約2カ月ぶりの高値を付けたが、7月に一時盛り上がった英中銀(BOE)の早期利上げ観測が下火になると144円付近まで反落した。もともと、ポンドも円もドルに対して上昇した一方、ユーロに対してはいずれも下落するなど、両通貨ともに独自の方向感を見出せなかった。このため、7月のポンド/円相場は今年2番目に小さな値動きに留まった。



四本値	
OPEN	146.029
HIGH	147.774
LOW	144.029
CLOSE	145.739

3日	英6月製造業PMIが54.3と、予想(56.3)および前回(56.7)を下回ると一時ポンド売りが強まったが、NY市場に入り米6月ISM製造業景況指数の好結果や原油価格の上昇などを受けて米国株が上昇すると円売りが強まり、ポンド/円は反発した。
7日	日銀が2月以来となる指値オペ(利回り表示で0.110%で無制限に買い入れ)を実施し、国債買い入れオペも増額した(残存5年超10年以下を、前环比で500億円増額)事を受けて円売りが優勢となった。しかし、英5月鉱工業生産が前月比-0.1%、英5月製造業生産が同-0.2%と予想(+0.4%、+0.5%)に反して減少するとポンド売りが優勢となった。英5月貿易収支が118.63億ポンドの赤字(予想:108.50億ポンドの赤字)となった事も重石となった。
12日	BOEの政策決定におけるキーパーソンと考えられていたブロードベント副総裁が「まだ利上げの準備はできていない」「BOEが利上げに向かっていると考える根拠はあるが、見極められない要因が多い」などと発言した事を受けて一時ポンド売りが活発化。ただ、英6月雇用統計が悪化しなかった事がわかると買戻しが入った。英6月失業率は前月から横ばいの2.3%、失業者数は0.59万人増と前月の0.77万人増から増加幅がやや縮小。また、2-5月の週平均賃金は前年比+1.8%と予想通りの伸びとなった。
18日	英6月消費者物価指数が前年比+2.6%、コア・前年比+2.4%と、いずれも予想(+2.9%、+2.6%)を下回った。英6月生産者物価指数も前年比+3.3%、英6月小売物価指数も同+3.5%と予想(+3.4%、+3.6%)を下回った事からポンド売りが強まった。
20日	4日間にわたる英国と欧州連合(EU)の離脱を巡る協議が、互いに歩み寄る姿勢をほとんど見せず終わった事や、フォックス英国国際貿易相が、合意なしで離脱する用意があるとの考えを示したことで、ポンドは全面安となった。フォックス貿易相は、英国がEU離脱に合わせて結ぶEUとの自由貿易協定(FTA)について、「人類史上最も容易なものの一つ」になるとの見解を表明。一方で、EUとのFTAがなくても「生き残り」は可能だと主張した。
26日	英4-6月期国内総生産(GDP)・速報値は前期比+0.3%、前年比+1.7%と市場予想と一致したため、ポンド相場に目立った反応は見られなかった。

GBP/JPY

日経平均

OPEN	20056.32
HIGH	20200.88
LOW	19856.65
CLOSE	19925.18

FTSE100

OPEN	7312.72
HIGH	7515.12
LOW	7303.46
CLOSE	7372.00

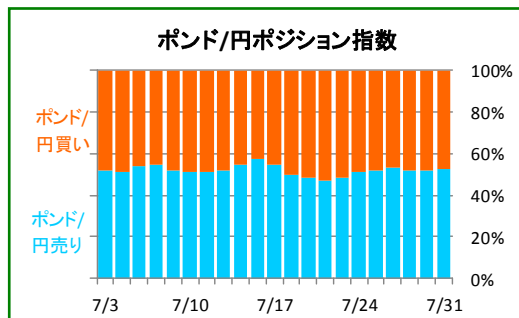
英2年債利回

OPEN	0.366%
HIGH	0.395%
LOW	0.230%
CLOSE	0.269%

英10年債利回

OPEN	1.293%
HIGH	1.338%
LOW	1.167%
CLOSE	1.230%

7月のポジション動向



8月の英国の注目材料

- ・7月英製造業PMI(1日)
- ・7月英建設業PMI(2日)
- ・7月英サービス業PMI(3日)
- ・BOE政策金利発表(3日)
- ・BOE議事録(3日)
- ・BOE四半期インフレレポート(3日)
- ・カーニー-BOE総裁、会見(3日)
- ・6月英貿易収支(10日)
- ・6月英鉱工業生産(10日)
- ・7月英消費者物価指数(15日)
- ・7月英小売物価指数(15日)
- ・7月英生産者物価指数(15日)
- ・7月英雇用統計(16日)
- ・7月英小売売上高(17日)
- ・4-6月期英GDP・改定値(24日)

8月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

ポンド/円相場は8月も方向感が定まりにくい展開となりそうだ。注目の英中銀(BOE)スーパー・サーズデー(3日)では、利上げに向けた明確な方針が打ち出される可能性は低いと見る。減速気味の景気動向と過熱気味のインフレ動向との両睨みで金融政策運営にあたるBOEとしては、金利は上昇させたくないがポンドの下落も避けたい、というのが本音であろう。そうした姿勢が、声明やカーニー総裁の発言に滲めば、ポンド相場を動かす決定打にはなりにくい。

主要国の株価が急変動するなど、市場のリスクセンチメントが大きく変化する出来事が起きなければ、円相場も大きくは動かないだろう。

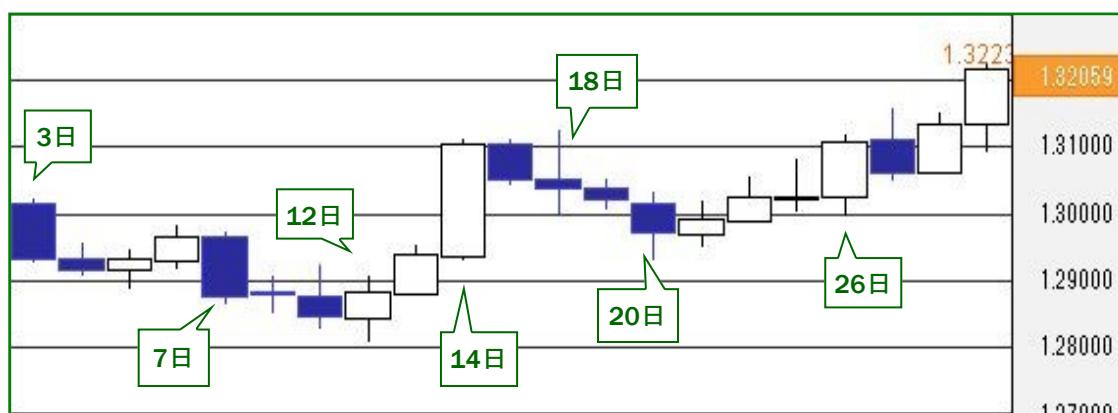
ポンド/円相場は、中期的に見るとブレグジット決定(2016年6月の英国民投票)以降の戻り高値である148円台前半が上値抵抗となっており、8月もこれを上抜けるのは困難と見る。一方で、緩やかに上向きに転じてきた26週移動平均線付近の142円台前半はサポートされよう。(神田)

(予想レンジ:142.000~148.500円)

ポンド/ドル 7月の推移

GBP/USD

7月のポンド/ドル相場は、1.28120～1.32237ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.5%の上昇(ポンド高・ドル安)となった。7月に高まった英中銀(BOE)の早期利上げ期待は、ブロードベント副総裁の発言などでやや納まったが、ポンドは下落する事なく上昇基調を維持した。イエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長が12日に行った議会証言でインフレ低下に警戒感を滲ませた事や、26日の米連邦公開市場委員会(FOMC)声明がハト派のと市場に受け止められた事から、ドルが全面的に下落したためだ。7月のポンドは決して強い通貨ではなかったが、それ以上にドルが弱く、31日には2016年9月16日以来の1.32ドル台に上昇した。



四本値

OPEN	1.30151
HIGH	1.32237
LOW	1.28120
CLOSE	1.32187

3日	英6月製造業PMIが54.3と、予想(56.3)および前回(56.7)を下回ると一時ポンド売りが強まった。その後も、米6月ISM製造業景況指数の好結果などを受けてドル買いが優勢となり、下落基調を維持した。
7日	英5月鉱工業生産が前月比-0.1%、英5月製造業生産が同-0.2%と予想(+0.4%、+0.5%)に反して減少するとポンド売りが優勢となった。英5月貿易収支が118.63億ポンドの赤字(予想:108.50億ポンドの赤字)となった事も重石となった。
12日	BOEの政策決定におけるキーパーソンと考えられていたブロードベント副総裁が「まだ利上げの準備はできていない」「BOEが利上げに向かっていると考える根拠はあるが、見極められない要因が多い」などと発言した事を受けて一時ポンド売りが活発化。ただ、英6月雇用統計が悪化しなかった事がわかると買戻しが入った。英6月失業率は前月から横ばいの2.3%、失業者数は0.59万人増と前月の0.77万人増から増加幅がやや縮小。また、2-5月の週平均賃金は前年比+1.8%と予想通りの伸びとなった。
14日	米6月消費者物価指数と米6月小売売上高がいずれも市場予想を下回ると、米国の追加利上げに対する不透明感などから、米長期金利が低下すると共にドル売りが活発化。ポンド高・ドル安が進み約10カ月ぶりに1.31ドル台に乗せた。
18日	英6月消費者物価指数が前年比+2.6%、コア・前年比+2.4%と、いずれも予想(+2.9%、+2.6%)を下回った。英6月生産者物価指数も前年比+3.3%、英6月小売物価指数も同+3.5%と予想(+3.4%、+3.6%)を下回った事からポンド売りが強まった。
20日	4日間にわたる英国と欧州連合(EU)の離脱を巡る協議が、互いに歩み寄る姿勢をほとんど見せず終わった事や、フォックス英国国際貿易相が、合意なしで離脱する用意があるとの考えを示したことで、ポンドは全面安となった。フォックス貿易相は、英国がEU離脱に合わせて結ぶEUとの自由貿易協定(FTA)について、「人類史上最も容易なものの一つ」になるとの見解を表明。一方で、EUとのFTAがなくても「生き残り」は可能だと主張した。
26日	英4-6月期国内総生産(GDP)・速報値は前期比+0.3%、前年比+1.7%と市場予想と一致したため、ポンド相場に目立った反応は見られなかった。

GBP/USD

NYダウ平均

OPEN	21392.30
HIGH	21929.80
LOW	21279.30
CLOSE	21891.12

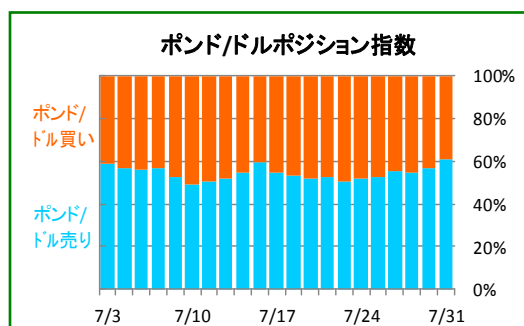
米10年債利回

OPEN	2.3143%
HIGH	2.3945%
LOW	2.2234%
CLOSE	2.2942%

英10年債利回

OPEN	1.293%
HIGH	1.338%
LOW	1.167%
CLOSE	1.230%

7月のポジション動向



8月の英国の注目材料

- ・7月英製造業PMI(1日)
- ・7月英建設業PMI(2日)
- ・7月英サービス業PMI(3日)
- ・BOE政策金利発表(3日)
- ・BOE議事録(3日)
- ・BOE四半期インフレレポート(3日)
- ・6月英貿易収支(10日)
- ・カーニー-BOE総裁、会見(3日)
- ・6月英鉱工業生産(10日)
- ・7月英消費者物価指数(15日)
- ・7月英小売物価指数(15日)
- ・7月英生産者物価指数(15日)
- ・7月英雇用統計(16日)
- ・7月英小売売上高(17日)
- ・4-6月期英GDP・改定値(24日)

8月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

英国における8月最大の注目イベントは3日の「スーパー・サズデー」だろう。英中銀(BOE)が、従来通りに声明と議事録を発表するほか、今回は四半期インフレレポートの発表と、カーニー総裁の記者会見が行われる。前回6月会合で、政策金利の引上げを支持したメンバーが3名(採決は5対3で据え置き)に上ったことから、一時は早期利上げ観測が強まったが、7月に入り英経済指標に弱い結果が目立った事などから8月利上げ期待は下火となった。これまで利上げを支持してきたフォーブス委員が退任し、後任のテンレイロ氏が据え置きを支持すると見られている事も利上げ観測を後退させている。スーパー・サズデーでは①声明で将来的な利上げスタンスを表明するか、②利上げ支持メンバー数が3名以上に増えているか、③インフレ見通しと成長見通しのバランスをどう取るか、④ブレグジットの影響に対する見解をどう示すか、などが注目すべきポイントとなる。

一方、7月のポンド/ドル相場の上昇は、主にドル安によるものであり、8月も米国情勢から目が離せない状況が続くそう。米国でも雇用環境の改善が続く一方でインフレの加速が見られない事から、先行きの利上げに対する市場の見方が揺らいでいる。米7月生産者物価指数(10日)や米7月消費者物価指数(11日)などのインフレ指標にも注目が集まるだろう。(神田)

(予想レンジ: 1.28500-1.35000ドル)